

国の礎となった多くの戦友達のお蔭と感謝しながら、戦友のご冥福をお祈りしております。

このような幸せを壊すいかなる名目の戦争も避けるべきであり、あの悲惨さを次の世代に経験させてはならない、語り継ぐべきであると痛感しております。

中国大陸・北辺から

南支まで幾千里

香川県 石井康一

私は大正十二（一九二三）年八月十七日生まれます。家族は両親の下に姉弟八人、全部で十人の大家族で、その中で私は長男で四番目の子でした。家は農業を営み、約一町歩ほどの耕作をしていました。近隣では大百姓と言われていたようでした。

ご承知と存じますが、瀬戸内海は九十九島（多

島美）で、小豆島は淡路島を除いて一番大きい島（三カ町ある）です。数多くの島々は永年の風雨波浪に耐えた松林や、岩頭に根を張って頑張ってる古木は樹齢幾百年、その生き様は私達日本人の誇りと言うか、心を打ち、一幅の絵のごとくです。

また、四国八十八カ所の霊場巡拝には数十日も掛けて全国より多くの人達が巡礼されます。わが小豆島には島四国と申しまして八十八カ所の霊場があり、数日で一巡できません。昔より摂津、播州、備前や遠く山陰方面からも多くの参拝巡礼者が来られました。皆様他人に親切で人情味豊かです。私は良き国、佳き人達に接しながら成長しました。

ただ残念なことは父親が若くして不帰の客となったことです。私が小学校を卒業し、さらに進学すべく勉強していた矢先のことでした。家庭状態を思う時に、僅か十五歳の少年でも、私は「俺は長男だ」と自覚しました。農耕は大変重労働で

すが「俺がやらねば誰がやるのだ」と自覚しました。わが肉体（膚力）と牛一頭がすべての動力でした。一町歩の田畑、一頭の牛、そして母と共に弟妹たちの面倒をみることもありました。

牛の飼料は山野草と稲藁です。その糞は堆肥として田圃へ還元します。親戚の叔父、叔母、従兄弟等も農繁期には手助けしてくれました。私の徴兵検査の頃は姉は巣立ちまして、それぞれの道を進むべくやっていますでしたが、四人の弟妹はまだ乳離れできずでした。

徴兵検査では第一乙種合格を申し渡されました。役場の兵事係が「石井さん、貴男が一家の大黒柱です。本来なら兵役延期の届けを提出して貰うところですが、大東亜戦争で戦線拡大の一途を走っている時です。申請は致し兼ねます。後顧の憂い無きよう銃後は皆さんで協力して守ります。心置き無く皇国のために働いて下さい」でした。

昭和十九（一九四四）年三月一日、広島第六部

隊に集合でした。二月の末に大勢の人に見送られて入隊しました。営庭に全員集合しまして軍服、シャツ（襦袢）、パッチ（袴下）それに軍帽を貸与され、私服は風呂敷に包み、各人宅へ郵送するとのことでした。一週間どこで何をしたら完全に忘れませんでした。ただ船便と各部隊の集合待ちでした。

博多の港を出帆して玄界灘の三角波に船は木の葉のごとく上下左右に揺れ、全員船酔いでした。釜山へ上陸し、一路鉄路を北西へと進み、龍山から日本海沿いに走り、会寧、凶們と豆満江を渡り満州へ入りました。現隊は牡丹江にあり、しかも戦車師団で、自分の中隊は師団防空第六中隊（機関砲）でした。

日本では四月になれば「花だより」が届く頃ですが、ここ牡丹江は、まだ日陰には黒くなった雪溜りがあつて寒かったものです。約一カ月初年兵教育を受けました。そして昭和十九年四月下旬に「原隊へ追隨せよ」でした。

ここで戦車師団について申し述べます。

戦車師団編成にあたりて。

昭和十五年十二月下旬より同十六年六月の間、ドイツ・ヒットラー総統の機甲軍団の電撃作戦の戦果に鑑み、山下奉文中将を団長として日本陸軍は機甲化のため「ドイツ」に軍事視察団を派遣した。

「注」昭和十四年、ノモンハン事変にて関東軍はソ連（現ロシア）外蒙軍に大敗した。よって機甲軍団編成促進の気運を高めた。従来日本軍は歩兵戦で「大和魂ですべて勝算あり」だった。そして動力は軍馬が主だった。その戦力たるや雲泥の差が戦場に如実に現われ、有為な部隊を壊滅させたのだ。

昭和十七年六月二十四日、第一機甲軍団が創設された。戦車第一師団（寧安）、同第二師団（佳木斯）及教導戦車軍団（四平街）等が編成された。いずれも現中国東北部（旧満州）だった。

昭和十八年十月、機甲軍団はさらに改編されま

した。第一・第二・第三と三分割されて、戦車第一師団は日本内地の帝都防衛のために関東地方へ移駐し、戦車第二師団は南方戦線に注入すべく、時の第十四方面軍司令官・山下奉文大将の傘下に入り、フィリピン・ルソン島に急派され、米軍の最強軍団と激戦の末玉砕しました。そして第三師団は駐蒙軍として新設されました。

ここに日本軍戦車と米軍戦車の性能を比較します。例として米軍M4シャーマン型は装甲八〇ミリ、七五ミリ砲一門、機関砲三丁並びに火炎放射器を有します。これに対して日本軍九七式最新形戦車では装甲三五ミリ、砲は四七ミリ一門、機関銃二でした。

また戦車師団と言っても戦車のみでは編成できない。補助・援護・支援・補給・衛生看護などの全兵科、さらに歩兵・捜索・砲兵・工兵・輜重隊・野戦病院など全兵科の協力あってはじめて活躍できるのです。

自分は戦車第三師団の高射砲中隊で一個中隊百五十人で高射砲三門・機関砲六門・小銃の徒歩分隊です。自分は観測班（測遠器）で眼鏡係だった。そして昼夜の別なく輪番にて眼鏡を覗き、天空と地平を警戒していました。従って夜間の分哨（衛兵）勤務は免除でした。

昭和十九年四月二十日、牡丹江からようやく本隊に追従でき、「河南作戦」で開封西方・黄河の敵前渡河を行いました。第三十七師団（冬兵团）九州男子の熊本・都城・鹿児島 の健脚師団が渡河せんとするのを、空からの敵の襲撃に対して我が隊は砲座を整え、観測は一羽の小鳥も見落とさぬ心意気で、全軍布陣しました。自分としては初陣です。小便をちびるくらい緊張しました。以後は各戦線に参加する度に度胸がついて、身近に落ちる爆弾・砲弾・小銃弾等々、その空気の摩擦音で弾着が判明できるようになりました。

同年六月末頃、戦車第三師団は機動開始、進軍

です。そして同行の防空掩護えんごに任ぜられました。敵ノースアメリカンB25は中型爆撃機です。カーチスP40戦闘機は超低空で飛来し銃撃を反復繰り返す。低空のために弾幕を作ることができず、残念ながらも致し方なしでした。戦車第十七連隊と同じ防空掩護に任ぜられ（第十七連隊は嵩県支隊と云う）、引き続き竜門攻略戦に同行し防空掩護の任に当たりました。勿論高射砲、高射機関砲、高射機関銃です。自分は砲座より少し離れた所で観測していました。発砲、発射の指示を出すので緊張しました。一発の砲弾・弾丸を無駄に使用しては駄目だ一発必殺の心構えで戦いました。

引き続き洛寧攻略戦（搜索隊）の防空掩護、洛陽包囲攻略戦の防空掩護、靈宝作戦の防空掩護に当たりました。中条山脈周辺に布陣し、黄河の要衝函谷関の激戦は昭和十九年六月十日、十一日だったと記憶します。この時は高射砲の地上射撃を敢行したのです。信管弾着炸裂が一〇〇か二〇〇メートル、時間で二、三秒にて炸裂です。砲手

も生きた心持ちせずだったと後刻話してました。但し威力の程は驚く程でした。

作戦が一段落しましたので霸王城（黄河南岸）へ帰陣しました。

同年七月五日より中支第十一軍による湘桂作戦に参加しました。戦車第三師団より独立戦車第六旅団が新しく編成され、京漢沿線から漢口に行動しました。七月二十三日頃から八月二十二日とあります。この間漢口において各兵器、車輛整備及び物資の補給等々のため滞在しました。但し要地防空の任務の為に我が中隊は瞬時の休養もなく警備警戒の任にありました。そうした中でも漢口には発電設備があり、何カ月ぶりに電灯の光の下で小豆島の家族宛に軍事郵便はがきを出すことができました。文面も簡単なもので「皆さん元気ですか、吾れ壮健なり」とだけ、軍事秘密で軍事及び居所等は記入厳禁でした。ここで軍は充分英気を養いました。

いざ始動となり揚子江（長江）を渡河して武昌から湖南省、そして広西省へと進軍しました。その間幾多の戦闘がありました。この時点では制空権は敵（米軍）の手中にあり、友軍の飛行機は一機も飛来せず、このため昼間の行動は不能で、すべて夜間行動、行進でした。友軍の戦車や貨物自動車等の残骸が至る所で見受けられました。ある峠道では幾十輛もの自動車が攻撃を受け、先頭車輛と最後尾車輛が火災を起こし、中間車輛は全部中国軍に攻撃され壊滅したとのことでした。

昭和十九年八月二十三日からの足跡を中隊行動記録より辿りますと、漢口―武昌―長安―長沙―衡陽―五塘―洪橋―祁陽―全県―桂林―柳州へと、同年十一月二十七日まで機動し、要点地区及び戦闘時には防空軍掩護の任を全うしました。中でも十一月の柳州攻略戦は悲惨と言うか壮烈でした。敵の正規軍による猛反撃で、多数の重火器での攻撃でした。そして二十七日より柳州飛行場の

要地防空の任に就きました。友軍機は一機もないが、敵に使用させぬためでした。

昭和二十年二月二十日、里春嶺討伐作戦参加、第三師団（幸兵団）名古屋編成騎兵第三連隊との共同作戦でした。同年三月八日、臨時機関砲中隊が新しく編成されました（志水隊です。わが隊です）。

三月二十一日、戦一搜索隊（防空隊・隣接部隊）並びに戦車第二十六連隊等に改編されました。尚前年の夏に硫黄島に転出した部隊は全滅だったとを聞きました。この部隊には、ロスアンゼルス・オリンピックの馬術競技のメダリスト・西中佐がおり、名誉の戦死をされました。

同年五月二十日、「イ号反転作戦」が発令されました。この作戦は大陸を縦断して朝鮮から仏印まで打通し、所在の米軍を撃破し、基地を占領・没収する「大陸打通作戦」と称されました。本時点にてフィリピンは持久戦に入り、ビルマ方面は敗戦の極に達し、沖縄は激戦の最中だった由（自

分達は何も知らずだった）です。

昭和二十年六月四日、広西省脚板川橋梁警備掩護中に、米機ノースアメリカンP51戦闘機編隊に超低空攻撃を受け、多くの犠牲者が出ました。第二小隊長戦死のほか重軽傷者が多数出ました。その後、敵空襲には最大の神経を使うようになりました。特に自分達の防空隊の責任において敵機の跳躍を許すなという思いでした。払暁・薄暮の頃に飛来して落下傘爆弾や小型爆弾を高度より落下して飛び去るため高射砲も機関砲も弾着できず、敵の独壇場でした。

また、炎天下であり、マラリア、アメーバー赤痢等の風土病に罹り、不潔からくる皮膚病や虱の繁殖などで全軍の体力は極端に弱まってきましました。

昭和二十年七月二十六日、大濠江口、軍橋防空掩護を命ぜられました。衝陽・芷江^{シッコウ}作戦の敗北により第十一軍の柳州へ後退（転進命令）命令があ

りました。名古屋（幸兵团）仙台（鏡兵团）と記憶します。最後尾の殿は広兵团で九州男子の勇猛師団でした。蒋介石の正規軍と毛沢東の共産軍が我先にと急追、来襲し、独立混成旅団が軍橋を守備していました。油日照りの無風状態の日が何日も何日も続いた時でした。我が隊は全軍の渡橋を見極めた後に工兵隊が爆破することでした。各砲座を据え着けていました。

同日十時頃に爆音激しく敵機P51四機が来襲しました。「スワ敵襲！ 御座んなれ」と。橋梁は全軍が渡る間に爆破されたら大変だ。一番機が機銃掃射して上昇する。二番機が急降下して来た。弾薬が乏しく射撃も抑制していましたが発砲命令が出て見命中、空中爆破で墜落しました。パイロットは米軍中尉でした。遺体の胸ポケットには若い女性と幼児の写真があり「お互いなんの憎しみも無いのに殺し合う非道、これが戦争なんだ」、彼の血潮もこの大地の草木の糧となったのです。ひたすら冥福を祈ったものです。

昭和二十年七月二十九日、軍橋を工兵隊が爆破し、陣地を撤去しました。同年八月二十二日に湖南省湘橋において終戦を知りました。一カ月余り北進し、十月一日長沙にて、蒋介石の中国正規軍部隊に武器を接収されました。そして一個中隊に三八式騎兵銃を十五丁、自衛のために貸与されました。思えば昭和十九年三月一日に軍人として正装してから今日まで、昭和二十年十月までの一年八カ月間、軍帽（戦闘帽子）は一度も洗濯したことなく無でした。自分の汗と垢が滲み込んでいる宝物のようでした。

昭和二十年十月十五日、中支江西省湖口の山奥張村に一時抑留され、少し経過した時に劉官人村に移動、ここで抑留生活を送りました。捕虜と言っても終戦による捕虜ですから誰一人として卑屈になることなく、その日その時の労役に服していました。作業はすべて軽作業でした。

昭和二十一年の新春を迎えました。蒋介石総統

は日本軍捕虜に、新春に対して特別の食事を与えよと指示命令したとか。中国は春分の日が春慶節と言って一番大切な年初めの祝日です。日本の風習や文化を熟知しているので感服しました。

同年五月十五日、帰国命令に依って湖口より乗船し揚子江を下り、江蘇省、南京を経て上海に着しました。同月末の三十一日、上海港から日本船「大瑞丸」に乗船出帆しました。六月二十三日鹿児島に上陸、二年四カ月ぶりに日本の土を踏みしめました。身体検査及び消毒、検疫をすませ市内の高島屋に宿泊しました。

翌二十四日、同屋上において東方遥拝を行い、解隊式にて全員解散でした。そして援護局より交通切符と幾許かの金子を受け取り、一路鹿児島本線にて北上し、出陣時の門司から下関と山陽本線の岡山まで来ましたが、大きな街は全部壊滅していました。岡山から故郷小豆島への船便にて懐かしく美しい我が故郷に帰りました。皆元気で、先祖の霊に手を合わせ無事帰還の報告行い、

翌日は近隣や親戚巡りで礼を述べ、即働くことが頭にいっぱいでした。

農業は勿論の事、林業にも手を出して、日本国復興・再建に取り組みました。造園業もやりました。消防団にも入団して村の防災にも少しは貢献しました。年々すべてが整備され、道路事情も良くなり、「フェリー」ができて自動車が多くなりました。そこで油に着目してガソリンスタンドを経営し、現在は老後を幸福に生きさせて頂いております。

それにつけても、中国大陸で草むす屍となられました各々戦友霊位の泰らかな眠りを祈っています。